



言葉の力を高め伝え合う喜びを知る

国語科

新井 拓 ・ 鈴木 真之介

I はじめに

平成28年2月16日、朝日新聞の「折々の言葉」に以下の言葉が掲載されていた。

「真の方法は、探究されるべき物事の性質に従う。」

エドムント・フッサール

あらゆる対象を等しく分析できるような一つの方法は存在しない。物事の真相を捉えるにはそれにふさわしい方法、文体、もしくは表現のスタイルがある。対象がナイフの研ぎ方を教えてくれるのであって、対象にナイフの切れ味を押しつけてはならない。これは芸術や建築についても言えること。〈現象学〉という分析の方法を提唱した哲学者の「厳密な学としての哲学」から。

筆者の鷺田清一は「これは芸術や建築についても言えること」と述べているが、「教育」についても同じことが言えるのではなからうか。「生徒が授業の在り方を教えてくれるのであって、生徒に（教師が考えた）授業を押しつけてはならない。」と。

国語科が目指す言葉の力を高めるための方法の一つではない。生徒が「伝えたこと」と「伝わること」は必ずしも一致しないというスタートラインに立ち、試行錯誤を重ねて言葉の力を高めていくには、どのような授業の在り方がふさわしいのか、生徒の思考に寄り添いながら、不断に見直し改善を続けていく。生徒の思考に添った授業は、生徒自らが学び方を選択した授業につながる。そして、生徒が自ら選択した学びの過程を客観視し、次の学びに対する見通しと意欲をもつことを目指している。授業は生徒の学びの場であるという覚悟をもって、言葉の力を高めるための授業を、生徒と共に創り上げていきたい。

II 教科研究内容

1 国語科における「自律」と「共栄」に向かう学び

国語科で目指すことは言葉の力を高めることである。具体的には適切に表現したり正確に理解したりすることや、思考力や想像力を養うことを目標としている。では、「『自律』と『共栄』に向かう学び」を通して言葉の力を高めるにはどのようにしたらよいのであろうか。

まず、言葉の力を高めるといふ目指す方向を生徒と共有する。単元や授業においては目標を共有することになる。更に、現状を確認する。これから学ぶことと既習事項の関係を想起する。そうすることで、学びの見通しを形作る。次に言葉の力を高めるための具体的な方法を考え実行する。使える時間、場所、道具などを示し、生徒が自ら計画したり選択したりして学びを進める。ここで重要となるのが他者の存在である。言葉の力は、他者との関係の中で、相手や目的、場面に応じて表現したり、理解したりすることを通して磨かれるからである。また、思考力や想像力を養うためには、他者の存在は大きな刺激になるからである。最後に、それまでの取組を振り返る。自ら考えた方法が言葉の力を高めるためにどのように寄与したのか、その結果、どんな力が高まったのか、また他者の存在が自分の学びにどのような影響を与えたのかを客観的に見直し、次への学びにつなげていく。

こうした学びを積み重ねていくことで、生徒自らが言葉の力を高め、日常生活や他教科の学びにおいても生かそうとする意欲につなげたい。

2 「自律」と「共栄」に向かう視点の手立て

(1) 「自律」に向かう視点

① 理想の姿を共有し、既習事項を活かして学ぶ単元構成

見通しをもち他者と互いに活かし合いながら学びを深めるために、生徒が目標を共有し既習事項を活かした学びを展開することができる単元を構成する。生徒が互いの考えを出し合いながら理想とする姿をイメージし共有することで学びのゴールを明確化する。次に、生徒が学びの見通しをもち解決の方法を計画したり、資源を選択したりするために、以下のことを生徒と確認しながら授業を展開する。自分

は何が分かっているか、何が分かっていないのか。目標に近づくためには何が分かればいいのか。目標に近づくためにはどのような方法が適しているのか。その方法を実践するために必要な資源は何で、誰と関わればいいのか。ここで大切にすべきことは、これらを生徒自らが考えることである。全てが分かっている状態で学びの見通しをもち解決の方法を計画することはできない。かといって全てが分かっている状態では学びに向かう意欲がわからない。「自分はこう考えるけれど、もしかしたら足りない部分があるかもしれない。」という疑問をもち、より確かなものに近づけていくために、他者の意見を求めたり、本文を読み返したりしたいという気にさせることが大切である。そのためには既習事項との関連が重要になる。これまでどんなことを学んできたのか。また、どんな方法で学んできたのか。それらを的確に把握して単元を構成することで、生徒が既習事項を手がかりに学びの見通しをもち解決の方法を計画したり資源を選択したりすることにつながる。

② 試行錯誤を重ねながら目標に迫る授業展開

目標に迫る方法の一つではない。むしろ、一直線にゴールに向かうよりも、色々な可能性を吟味して進んでいくほうが、深い理解や豊かな表現につながると考える。まずは、自分の考えをもつ。その考えを確かめたり、深めたりするためには何を調べたらいいのか、誰と交流したらいいのか考える。実際に調べたり、交流したりして、自分の考えと同じところや異なるところを見つける。それを元に自分の考えを更新し、また新たな学びに向かう。このように、生徒が自ら必要と考える資源や他者と関わり、様々な考え方を参考にしたり、取り入れたりしながら、自らの考えを広げたり深めたりする授業を展開する。例えば、物語の主題案を出し合い、適切な主題はどれか絞っていくという学習活動を設定する。主題として表される言葉は多様であるためゴールに向かって一本道でたどり着くことはできず、様々な方向へ視野を広げることになる。そこで、自分が考えた主題案が適切かどうかを判断するためにすべきことを選択する。誰と交流すべきなのか。何を交流すべきなのか。もしくは参考となる資料にあたる必要があるのか。そしてその結果を踏まえて自分の主題案を更新していく。こうした過程で、主題に迫るための着眼点をより多く獲得していくことができる。

(2) 「共栄」に向かう視点

① 時間と場所と道具を確保し交流を促進する場の設定

伝え合う力を高めることを目標に掲げている国語科の学びにおいて他者との交流は欠かせない。そして、その交流は生徒自らが求めるものでなくてはならない。そのために、時間と場所と道具を確保し、生徒が目的をもって他者と関わり、互いの考えを交流することで、新たな考えが生み出される場を設定する。その上で、それぞれの課題を解決する方法を考えて実践するように促す。例えば、教室環境を前と後で二つの空間に分け、前方の机のない空間を交流してよい場所、後方の机のある空間を個人で課題を追究する場所にする。そして、自分の考えを黒板に張り出し、交流したい相手を探すときに利用する。また、交流する場合は目的や相手を明らかにするように促す。自分は何を知りたくて誰と交流する必要があるのかについて自覚的になることが次の学びの見通しにつながる。最後に個人の学びを全体に還元し共有する。その際、自分の学びが全体の学びにどう生きたのかを自覚することで、個人の学びが集団の学びを創っているという意識を高める。

② 互いの学びに寄与する役割分担

生徒が他者との関わりを求める主な目的は、自らの考えを広げたり深めたりすることである。そこに、「他者のために」という責任感を加える。例えば、自分の意見が他者のスピーチの向上に寄与することを確認する。そうすることで、自分のためだけのとき以上に他者と関わる意欲を高める。また、「他者のために」という視点は、何を伝え合うべきかという見通しをもつための一助となる。更に、自分の考えが他者の学びに役立つことで、集団における自己有用感が生まれ、学びに対する意欲が高まると考える。例えば、俳句の鑑賞をするときに、グループで分担して俳句について調べる活動を行う。他のグルー

プの同じ俳句を担当している相手と交流することで理解を深め、それを自分のグループのメンバーに伝える。自分の考えや交流の成果がグループ全体に還元されることで自分の学びの成果を実感できると考える。

③ 自分の考えを何度も語り直す場面の設定

課題に対して自分の考えをワークシートに記述するとき、生徒は自分の考えを整理しながら文章に表現する。しかし、すぐには自分の考えをまとめられない生徒も多い。また、授業を通して考え方は変わっていく。そんな時に、自分の考えを何度も語り直す場を設定することで、自分の考えを整理する一助とする。それまでに何となく考えていたことを他者に伝わるように語ることでより明確にする。また、語ったあとの他者の反応は、自分の考えを客観視することにもつながる。互いに聞き合うことによって、語る側は自分の考えを整理することができ、聞く側は自分の考えを広げる新たな視点を得ることができる。このように、自分の考えを語り合う場面は互いの理解を深めることに役立つという意識を高め、互いの成長を支え合う学びにつなげていく。例えばワールド・カフェ形式の交流などを取り入れる。生徒は、自分の考えをグループで他のメンバーに説明したり、グループでまとめた内容を他のグループのメンバーに伝えたりと、何度も自分の考えを口にするようになる。この語り直しを行うことで、漠然としていた考えをまとめたり、修正したり、深めたりする効果が期待できる。更には、そうした個人の学びが組み合わせることで全体の学びも深まると考える。

④ 学びの履歴の視覚化と振り返り

単元の最初と最後に自分の考えを書く場面を設定し、自己の学びを振り返ることで、自分の学びにどのような方法や資源が寄与していたのかを認識する。まず、自分の考えを記述することで、自分の考えを整理する。そこを出発点に、他者と関わりながら学びを進めていく過程を記録する。その際には、他者との関わりがわかるように、自分の考えと他者の考えは異なる色でワークシートに記述するようにしておく。また、日頃から参考となった考えは積極的にメモをとるように促す。また、ときには他者の学びを支えるために、互いのワークシートにアドバイスを記入するなどの場面を設定する。単元の途中では、そうした記録を振り返ることで、参考になった他者の意見や、更に聞いてみたいことなどが明らかになる。また、単元の終末に自分の考えを書くことで、最初の考えが、どのような授業を経て、どのように変わったのかを振り返り、学びの過程を客観的に把握することにつなげる。このように、単元の振り返りを記述することは、それまでの学びを抽象化して定着させることや、新たな学びの見通しにつながると考える。

Ⅲ 実践例

実践例 1

1 題材名 「好きなもの」を紹介しよう スピーチをする 中学1年

2 題材のねらい

- ① 話の構成や順序を工夫し、相手を意識した上で自分の言いたいことを整理する。
- ② 声の大きさや話す早さ、目線の配り方などの話し方を意識することで、聞き手に分かりやすく話す。

〔学習指導要領〕「A 話すこと・聞くこと」

イ 全体と部分、事実と意見との関係に注意して話を構成し、相手の反応を踏まえながら話すこと。
ウ 話す速度や音量、言葉の調子や間の取り方、相手に分かりやすい語句の選択、相手や場に応じた言葉遣いなどについての知識を生かして話すこと。

3 研究とのかかわり（「自律」と「共栄」に向かう視点の手立て）

理想の姿を共有し、既習事項を活かして学ぶ単元構成／時間と場所と道具を確保し交流を促進する場の設定
本題材では互いに自分の「好きなもの」を紹介するスピーチを行う学習を設定した。日常生活の中で

取り組んでいる「一分間スピーチ」を振り返り、自らの課題を見出すことを通して、どのようなスピーチが望ましいのかを模索した。話し合いの中で、理想とするスピーチの要素を話題性や話の構成、順序の工夫など内容的側面と言語技術的な側面とに分類し、一つの基準として「スピーチの極意」を作成した。また、この基準に向かう過程にはどのような学習が必要かを考え、同じ学級の仲間に伝えるという状況にふさわしい話題を選んで構成を工夫する場面と、自他のスピーチを評価し合い、より良いスピーチを練り上げる場面との二つのステップを設定した。生徒自らが理想の実現に向けたプランを立案する場面を設定することは、主体的に学びを進める原動力になると考える。

より良いスピーチを練り上げる場面において、生徒は付箋を使ってアドバイスを求めたり、タブレット端末を用いて録画し、映像を振り返りながら自らの課題を見出したりするなど、自己の成長に必要な道具を適宜活用しながら、自分たちが設定した「良いスピーチ」を実現するためには何が必要かを模索した。アドバイスの中には自らの課題意識と重なるものや、これまで気付かなかった点を指摘するものなどが存在し、その中から自分にとって必要な情報を取捨選択して次の課題へと向かう姿が見られた。



〈理想とするスピーチの要素を出し合う〉

また、より良いスピーチを練り上げる場において様々な道具を選択、活用しようとすることは自分だけではなく他者の成長にもつながる。学習のプランを立案する中で、互いの課題を見出して評価し合い、高め合う場を求めた姿は、他者との関わりの中で自他ともに高め合おうとする意識が表出したものに他ならない。

互いの学びに寄与する役割分担

他者の成長のためにふさわしいアドバイスを伝えるという役割を担わなければならない状況を作ること、他者の成長に貢献できた実感を得られるとともに、伝えた結果を受けて向上した他者の姿からさらに自分の成長にも生かせる要素や新たな課題を見出していく姿にもつながったと考える。「自分では気付かなかった課題を知ることができたし、他の人の課題も見つけることができ、自分も他人も高め合えた。」という振り返りからは、他者から学ぶ価値の尊さに気付き、次の学びへと生かそうとする姿勢がうかがえる。



〈録画してもらい、自らの課題発見に生かす〉

実践例 2

1 題材名 『アイスプラネット』 椎名誠 (光村図書 中学2年)

2 題材のねらい

- ① 登場人物の言動に着目して、人物の関係や心情の変化を捉える。
- ② 登場人物の考え方や生き方などについて、自分の経験などと関連づけて考えをもつ。

[学習指導要領] 「C 読むこと」

イ 文章全体と部分の関係、例示や描写の効果、登場人物の言動の意味などを考え、内容の理解に役立てること。

エ 文章に表れているものの見方や考え方について、知識や体験と関連付けて自分の考えをもつこと。

3 研究との関わり (「自律」と「共栄」に向かう視点の手立て)

試行錯誤を重ねながら目標に迫る授業展開

既習事項を確認し、主題を考えることから始めた。まずは、個人で主題案を考える。次に自分の考えを黒板に示し、自分と同じ考えの相手や異なる考えの相手を選択しながら交流を進めていく。その過程で、自分の考えの根拠を確かめたり不足しているところを補ったりして、自己の考えを広げたり深めた



〈黒板にはった個人課題を参考に交流する〉

りした。更に、そのときに気になったことを個人課題として設定し、新たな追究につなげた。このときに、主題案の交流で登場人物について触れた生徒の発言を紹介することで、単元の目標に迫る個人課題が生まれるようにした。その結果、「『僕』の心情の変化をより詳しく読み取る」や「作品中の『ぐうちゃん』『母』『父』のそれぞれの役割を考える」などの個人課題が出された。

課題を解決する時も、主題の交流と同様、自分の考えた個人課題を黒板にはり、それを参考に似た課題の相手に質問にいつ

たり、異なる課題の相手に自分の考えが伝わるか確かめにいったりする姿が見られた。続いて、個人課題の交流で発表された「ぐうちゃん」「母」「父」の存在に焦点を当て、自分は誰の考え方に一番共感するかを考え交流した。生徒はそれぞれの立場の意見を聞きながら、自分の理想とする生き方について考えていた。

学びの履歴の視覚化と振り返り

最後に本単元で学んだことを記述した。その際にワークシートを見返すように促した。初発の感想と作品に対する今の思いを比較することで、自分の学びが明確なると考えたからである。また、ワークシートを記述する際には、人の意見は別の色で書いているので、そこから他者の支えを感じることもできる。右に示した生徒の振り返りからは、他者の考えから主題の解釈が変わったこと、登場人物の役割を理解していること、作品と自分の将来とを結びつけて考えている様子などが読み取れる。このように、自らの学びを客観的に振り返ることが、次の学びに対する見通しや意欲につながると考える。

〈アイスフラネットの授業をとおして思ったこと〉
 私の一番最初に考えていた主題は「人の本当の姿」で、人という小さい部分だけで考えていて、権威者さんもそれを伝えたいのだから、思っていました。ですがこのアイスフラネットでは、他の考えを聞いたり、登場人物の心情、手紙など色々な視点から見たりするうちに、もっと大きい「自由や、本当の生き方」などを教えてくれるのかなと思いました。また、私自身もぐうちゃんのように、楽しく思い通りに生きてみたいと思いました。母や父など全く逆や似ている考えの人を描くことで、それが強調されている気がしました。
 やるべきことをやりながらも、自分が本当にしたいことを見失わない大人になりたいと思いました。

IV 実践から見えてきたこと

これまでの実践を通してもっとも感じたことは生徒のもつ可能性の大きさである。「自律」と「共栄」に向かう学びを展開するための手立てを講じてきたが、生徒が共に活かし合い解決に向かうことで、教師の予想を超える知を獲得する場面が見られた。例えば、文学的文章の解釈では、互いの考えに刺激を受けてより多様な視点や考え方が示され、目標を超えて作品の魅力に迫ることができた。こうしたことから、「自律」と「共栄」に向かう学びの展開は、求める生徒の姿である「自己を拓き、協創する生徒」の育成に寄与するものであると考えている。

一方課題としては、生徒の思考の流れを重視するあまり、時間がかかってしまったことや、授業の焦点がぼやけてしまったことが上げられる。こうした課題を解決するためには、生徒の考えの変容を的確に予想・把握しコントロールする力が求められる。生徒の学び方について理解を深め、より効果的な学びを生み出すことができるように手立てを講じていきたい。

V 参考文献

- ・秋田喜代美『学びの心理学』左右社、2012年
- ・文部科学省『中学校学習指導要領解説 国語編』2008年